ロンドンの夜間教育活動の拡大と無償型成人教育の専門分化

—「フリー・インスティテュート」を手がかりに—

関　　直　規*

本稿は、イギリスの代表的な地方教育行政機関の一つであった、ロンドン・カウンティ・カウンシルのフリー・インスティテュートの発展と現場の取り組みを考察したものである。

このインスティテュートは、受講料を負担できない男女に、一般教育を提供する専門的夜間教育機関として、1913年に誕生した。そのルーツは、受講者の深刻な出席問題を抱えていた無償型普通夜間学校であり、発足時に負の影響を受けている。だが、有償化への切り替えや登録料制度創設で、その後の発展を導く基盤が構築された。開校地は、ポプラーを中心とする貧困地区に集中しており、無償型教育への期待は大きかった。

現場の取り組みを見ると、基礎、実用及びレクリエーション科目を中核に据え、社会的不利益層の参加を促した。また、性・年齢別のきめ細かなクラス分けを試み、同一科目の立体的な教育アプローチを実現している。ロンドンの夜間学校の組織の基本方針は、専門分化であった。無償型普通夜間学校から専門分化したフリー・インスティテュートは、受講者のニーズや背景等を柔軟に反映しつつ、夜間教育活動の伝統を再構成することによって、無償型成人教育の重要な役割を担ったのである。

キーワード：フリー・インスティテュート、ロンドン・カウンティ・カウンシル、無償型成人教育、イブニング・インスティテュート

はじめに

イギリスにおける成人教育の大衆化の要求は、第一次世界大戦を契機に、本格的に組織化されていくが、ロンドンの地方教育当局（Local Education Authority、以下、LEAと略称する。）であるロンドン・カウンティ・カウンシル（London County Council、以下、LCCと略称する。）は、1913年の夜間教育の抜本改革によって、他のLEAに先駆けて、その構想を実現した。ロンドンの新しい動向は、復興省（Ministry of Reconstruction）の成人教育委員会（Adult Education Committee）がまとめた最終報告書[1)]が紹介する等、早くから注目されている。

この改革は、ロンドン学務委員会（School Board for London）時代以来の伝統的なイブニング・スクール（evening school）を、各学校に固有の役割を与えたイブニング・インスティテュート（evening institute）に再編成するものであり、ロンドン大学拡張事業やトインビー・ホール（Toynbee Hall）等の民間組織への財政支援に加え、不参加層を対象とする成人教育機会の開発をねらいの一つとしていた。20世紀のイギリス教育政策史を論じたゴードン（Gordon, P.）等によれば、LEAの中で、LCCの成人教育機関が最もよく知られており[2)]、さらに、第二次世界大戦後のイギリスの教育制度を規定した1944年教育法が、各管轄地域における継続教育の十分な便宜の提供をLEAの責務とする方向性を考えると、イギリスのLEAの成人教育発展史において、1913年のLCCの夜間教育改革は、最も重要な出来事の一つと言えるだろう。

*せき　なおき　東洋大学文学部教育学科

1913年に発足したインスティテュートの中で、「ウィメンズ・インスティテュート」（Women's Institute）と「ノンボケーショナル・インスティテュート」（Non-Vocational Institute、後のLiterary Institute）は、教育内容や活動の規模の点で、際立っており、これまで内外で研究成果が出されている[3]。しかし、LCCの代表的な取り組みの一つでありながら、実状が未解明のままであったのが、ロンドンの貧困地区に重点的に開校し、無償型成人教育の機能を持った「フリー・インスティテュート」（Free Institute）である。

今日、日本の社会教育を「成人・コミュニティ教育」と国際的な文脈において把握し、イギリスの成人教育を“community education”を織り込み、積極的に規定する動向の中で[4]、年齢、性別、障害、階級及びエスニシティ等を問わず、生涯学習へのアクセスを保障する、コミュニティに根ざす社会教育・成人教育を「成人・コミュニティ教育」と再構成し、その発展史を解明する基盤的研究は、重要な課題になっている。本稿は、この分野の開拓に貢献したLCCのフリー・インスティテュートに着目し、イギリス公文書館（The National Archives）等の所蔵する一次資料の調査・発掘に基づいて、両大戦間期における成立と発展を実証的に明らかにしたい。

Ⅰ．公立夜間学校の伝統と夜間教育活動の拡大

LCCのイブニング・インスティテュートは、ロンドン学務委員会の夜間継続学校（evening continuation school）を起源としている。1882年、大都市の貧しい若者が、過去の教育を継続し、人生初期の訓練の不備を直す機会が不可欠である、という問題認識から、夜間教育活動に着手した[5]。昼間学校を補完する期待から出発し、基礎教育の整備や時代・地域の要請に柔軟に対応しながら、多目的な夜間教育機関の役割を果たしていった。1902年教育法及び1903年ロンドン教育法によって、1904年、新しいロンドン教育当局であるLCCが誕生した後も、夜間教育政策の方針や活動は、維持されている[6]。

1913年の夜間教育改革のベースとなったのが、LCCの実践の蓄積をふりかえり、現状と問題点を本格的に明らかにした教育長報告書であった[7]。これによれば、改革前、三つの夜間学校があった。学芸・商業センター（science and art and commercial centres）、普通夜間学校（ordinary evening schools）、聴覚障害者学校（schools for the deaf）である。この中で、普通夜間学校は、受講日数や教科数を問わず、受講料が１シリングの「有償型」（fee-paying）と、受講料を要しない「無償型」（free）があった。報告書は、普通夜間学校を詳細に検討し、その大部分を構成する共学の商業教育中心タイプと、男女別学が一般的な工業・家政教育中心タイプに大別している。後者は、原則として、貧困地区に開校し、熟練を要しない労働に従事する若者・女工が、受講者のほとんどを占めた無償型学校である。また、無償型学校でニーズの高い教科目として、上位から、体操、洋裁、スリー・アールズ、木工、製図、声学、速記、読み方及び書き方、調理、算術をあげている[8]。

そして、報告書の中で、小規模・無償型の普通夜間学校で顕著に見られ、夜間教育活動の重要課題の一つと言及されたのが、受講者の出席問題であった。出席が任意であること、日中の労働で疲労した後の通学であること、ロンドンの一般的な労働条件として、遅い時間まで働く必要があり、数多くの職業で年間一定期間は、過度の労働を求めること、受講者の自宅・職場及び学校が離れていること、一年で最悪の気候下で開講していること、これに加えて、受講者の健康状態、不安定な雇用、ロンドンの魅力と娯楽等が要因となり、「イブニング・スクールは、出席状況を良くするため、格闘すべき極めて大きな困難を抱えている」[9]と強調している。ロンドン学務委員会時代以来の夜間教育活動の拡大に伴う、出席問題解決をねらいの一つとし、LCCは夜間教育改革に本格的に着手したのである。

1913年、LCCの上級教育専門部会（Higher Education Sub-Committee）は、イブニング・スクールに代わる新しい夜間教育機関として、イブニング・インスティテュートを提案した。「諸学校を慎重に分配することで、受講者数あるいは受講時間数が競合するあらゆる不安を解消し、各教育機関の責任者に対し、他の学校の教育理念を妨げることなく、目的を追求する自由を委ねる」[10]という視点から、従来のイブニング・スクールを、9つのイブニング・インスティテュートへ

再編成した。その一つに、地域で受講料を負担することのできない「男女に、商業教育ではなく、一般教育を提供する」[11] 専門的な夜間教育機関であるフリー・インスティテュートを含んでいた。14歳以上のロンドン市民であれば、誰でも入学することができた。なお、同インスティテュートは、女性、男性対象あるいは共学の三タイプあったが、女性対象は、別系統の学校であるウィメンズ・インスティテュートに無償型として組み込まれており、その実践は別稿で論じた[12]。そこで、次章では、男性対象及び共学のフリー・インスティテュートに焦点を当てつつ、具体的な展開を検討することにしたい。

Ⅱ．フリー・インスティテュートの発展と特質

(1) 無償化をめぐる問題

LCC では、新しい計画の策定・実施にあたって、「一年目の終りに、フリー・インスティテュートに入学した受講者の出席について報告し、必要であれば、不十分な受講に対処するために、対策を講じることを検討するよう提案する」[13] と付言していた。出席問題解決に深く関わる無償型学校の質確保への一念がうかがえる。

1913年9月に、共学11校、男性対象8校、計19校のフリー・インスティテュートが開校した。なお、女性対象は10校であり、合計17,000人が入学している[14]。前年度に48校開設されていた無償型普通夜間学校と比較すると、入学者数は約6,000人減少したが、一人あたりの受講時間数は、0.1%だけ上昇し、30.8時間となった。イブニング・インスティテュート全体では、53.9時間で、6.3%上がっていることを考慮すると[15]、フリー・インスティテュートの出席は、必ずしも良好とは言えない水準にあった。教育水準の低下について、中央教育当局の教育院（Board of Education）も懸念を表明している[16]。

そこで、上級教育専門部会は、改革初年度をふりかえり、木工クラスの教材を買う余裕があるのに、無償教育を求める受講者が入学した、という非常に悪質なケースや、近隣の年少者向けの商業ないし技術インスティテュートと競合することで、受講者を誤った進路に進ませてしまう危険性等を点検した上で[17]、二つの対策を提案した。第一に、有償化である。インスティテュートに特定の目的と受講料を再設定することによって、不真面目な受講者が混在する現場が変化することを期待した。実際に、三校の有償化が決まっている[18]。第二に、より重要な提言として、登録料を課すことにした。「インスティテュートへの入学に際して、すぐに6ペンスを出費させることは、受講者が真剣であることを保障するし、同時に、この学校の『無償』の特質に抵触することもないであろう。・・・大きなねらいは、一、二度しか出席しない受講者の入学を食い止めることである。6ペンスの登録料の課金は、この目的を保障する、と考える。フリー・インスティテュートがその名称を維持するためには、しっかり出席し、かつ返金を求める受講者に登録料を返還できるようにすべきであろう」[19]。この結果、フリー・インスティテュートの受講料は、引き続き無償とするが、全体の75%出席した受講者に、返金可能な6ペンスの登録料を求めることが決まった。その後、18歳以上の成人受講者については、1シリングに変わっている[20]。

以上の無償化をめぐる二つの修正の結果、1915-16年度の共学・男性対象の学校数が、12校へと大幅に減少する一方で、一人当たりの受講時間数は34.8時間に向上しており、制度的な基盤が完成した[21]。なお、市民向けの継続教育のガイドブックは、次のように紹介している。「夜間教育制度の主要な側面を取り上げてきた。（リテラリー、ウィメンズ、メンズ、ジュニア・メンズの各インスティテュートのこと―筆者注）・・・だが、フリー・インスティテュートに言及することなく、その全体を捉えることはできないだろう。フリー・インスティテュートは、ロンドンの貧困地区に開校し、クラスは地域の要求に応じているのだ」[22]。無償型の専門的夜間教育として、ロンドンの教育制度の一角に地歩を固めたのである。

(2) 量的拡大と地域分布

それでは、フリー・インスティテュートは、その後、どのように発展したのであろうか。表1は、1915-16年度から1936-37年度までの学校数及び入学者数の推移を整理したものである。最初に、学校数を見ると、この期間全体を通じて、10校前後が多く、安定的に展開したことがわかる。なお、1930年代以降の変化について、例えば、スミー

表１　ロンドンにおけるフリー・インスティテュートの発展（1915-16年度～1936-37年度）

	学校数	入学者数						一人あたり受講時間数
		男性	（内18歳以上）	女性	（内18歳以上）	合計	（内18歳以上）	
1915-16年度	12	1,596	352	799	146	2,395	498	35
1916-17年度	10	1,263	123	694	334	1,957	457	32
1917-18年度	10	1,281	67	1,244	519	2,525	586	31
1918-19年度	10	1,192	104	1,349	526	2,541	630	34
1919-20年度	10	1,956	468	1,449	470	3,405	938	39
1920-21年度	10	2,511	755	2,020	727	4,531	1,482	38
1921-22年度	10	2,367	…	1,768	…	4,135	1,279	38
1922-23年度	10	2,177	…	1,596	…	3,773	1,021	44
1923-24年度	11	2,532	…	1,567	…	4,099	1,261	51
1924-25年度	12	2,935	…	1,973	…	4,908	1,487	46
1925-26年度	12	…	…	…	…	4,610	…	…
1926-27年度	11	2,567	…	1,995	…	4,562	1,395	49
1927-28年度	11	2,682	800	2,205	675	4,887	1,475	51
1928-29年度	11	2,543	809	2,003	628	4,546	1,437	53
1929-30年度	11	2,369	818	2,067	695	4,436	1,514	59
1930-31年度	10	…	…	…	…	…	…	63
1931-32年度	9	1,415	551	760	251	2,175	802	65
1932-33年度	10	1,255	525	698	286	1,953	811	78
1933-34年度	9	1,394	557	855	320	2,249	877	76
1934-55年度	9	1,339	470	863	330	2,202	800	71
1935-36年度	7	1,418	487	785	288	2,266	775	58
1936-37年度	7	1,542	505	777	260	2,319	765	56

出典）London County Council, *Annual Report of the Council*, London County Council, *London Statistics* より筆者が作成。…は不詳。

表２　1925-1926年度のフリー・インスティテュート12校の種類・所在地と開講曜日・時間

学校名	種類	所在地	開講曜日・時間	
ボウ・クリーク	共学	Bow Creek, Orchard Place, E.14	火・水・木	7：35～9：35
ブリティシュ・ストリート	共学	British Street, E.14	月・水・木	7：30～9：30
コーマー・グローブ	共学	Comber Grove, S.E.5	月・水・木	7：50～9：50
ギャレット・レーン	共学	Garratt Lane, S.W.18	月・水・木	7：30～9：30
イルダートン・ロード	共学	Ilderton Road, S.E.16	月・火・水・木	7：30～9：30
ラバーナム・ストリート	男性	Laburnum Street, E.2	月・火・木	7：30～9：30
モアランド・ストリート	男性	Moreland Street, E.C.1	月・水・木	7：30～9：30
オレンジ・ストリート	共学	Orange Street, S.E.16	月・火・水・木・金	7：45～9：45
レッドクリフ	共学	Redcriff, Cow Lane, S.E.16	月・火・水	7：45～9：45
ロシェル・ストリート	男性	Rochelle Street, E.2	月・水・木	8：00～10：00
サーダー・ロード	共学	Sirdar Road, W.11	火・水・木	7：45～9：45
スミード・ロード	共学	Smeed Road, E.3	月・火・水	7：30～9：30

出典）London County Council, *A Guide to Continued Education in London*, Hodder & Stoughton Ltd., 1925, p.59.

表３　1921-22年度のオレンジ・ストリート・フリー・インスティテュートの時間割

開講科目	講師	開講曜日・時間 a=7:45-8:45 b=8:45-9:45 c=7:45-9:45					開講科目	講師	開講曜日・時間 a=7:45-8:45 b=8:45-9:45 c=7:45-9:45				
		月	火	水	木	金			月	火	水	木	金
算術（成人）	A. Crowley	b					声学	J. Keedwell			c		
算術（年少）	J. R. Day		b				針仕事	E. Denniston				c	
算術（成人）	A. Crowley		b				身体訓練	E. Chilcott		a			
算術（年少）	J. R. Day			b			身体訓練	E. Chilcott		b			
算術（年少）	J. R. Day				b		身体訓練	G. E. Thompson			a		
算術（成人）	A. Crowley				b		身体訓練	F. Oliver			b		
調理	D. Cooper	c					身体訓練	G. E. Thompson				a	
調理	D. Cooper		c				身体訓練	G. E. Thompson				b	
調理	D. Cooper			c			体操（女性）	F. Oliver	a				
調理	D. Cooper				c		体操	F. Oliver	b				
調理	D. Cooper					c	体操（年少男子）	W. Chilcott, E. Horne		c			
洋裁	I. Meechi, E. Rode		c				体操（年少男子）	W. Chilcott, E. Horne			c		
救急療法	F. Lacey	c					体操（年少男子）	W. Chilcott, E. Horne				c	
ブーツ修理	A. Fisher	c					読み方と書き方（成人）	A. Crowley	a				
ブーツ修理	C. C. Bruce		c				読み方と書き方（年少）	R. Day		a			
ブーツ修理	A. Fisher			c			読み方と書き方（成人）	A. Crowley		a			
ブーツ修理	A. Fisher				c		読み方と書き方（年少）	R. Day			a		
木工	W. Jones	c					読み方と書き方（年少）	R. Day				a	
木工	F. Evison		c				読み方と書き方（成人）	A. Crowley				a	
木工	W. Jones			c			読み方と書き方（少女）	I. Webster		b			
木工	W. Jones				c		読み方と書き方（少女）	I. Webster			a		
木工	F. Evison					c	読み方と書き方（少女）	I. Webster			b		
洗濯実習	C. Smith	c					体操	J .E. Gurney	c				
洗濯実習	C. Smith		c				体操	J. E. Gurney		c			
洗濯実習	C. Smith				c		体操	J. E. Gurney				c	
刺繍	E. E. Doudney	c											
刺繍	M. Wimhurst			c									

出典）London County Council, *Prospectus of the Orange Street Free Evening Institute Session 1921-22*, 1921.

表４　1936-37年度のスミード・ロード・フリー・インスティテュートの時間割

開講科目	講師	開講曜日・時間 a=7:30-8:30 b=8:30-9:30 c=7:30-9:30					開講科目	講師	開講曜日・時間 a=7:30-8:30 b=8:30-9:30 c=7:30-9:30 d=7:45-9:45 e=8:00-10:00				
		月	火	水	木	金			月	火	水	木	金
芸術趣味（女性）	C. Baumann		c				身体運動（年少男子）	R. E. Harding	a				
芸術趣味（男性）	G. Ososki				c		身体運動（成人男性）	R. E. Harding	b				
製図（成人男性）	G. Ososki	a					身体運動（年少男子）	R. E. Harding		a			
製図（年少男子）	G. Ososki	b					身体運動（成人男性）	R. E. Harding		b			
製図（女性）	C. Baumann			a			身体運動（女性）	L. Roberts			b		
製図（女性）	C. Baumann			b			身体訓練・ボクシング	H. Wilson					a
洋裁	…					c	身体訓練・ボクシング	H. Wilson					b
英語と図書館（女性）	D. Gould	a					旅行談話（年少男子）	…			a		
英語と図書館（女性）	D. Gould	b					旅行談話（成人男性）	…			b		
英語と図書館（男性）	L. Estrange					a	器楽（バイオリン入門）	E. Popkin				c	
英語と図書館（男性）	L. Estrange					b	身体運動（女性）	L. Roberts	b				
一般教育（成人男性）	C. Cunnigham		a				木工（男性）	H. C. Cower	c				
一般教育（年少男子）	C. Cunnigham		b				木工（男性）	H. C. Cower		c			
通俗科学（成人男性）	H. Bromley			a			木工（男性）	H. C. Cower				c	
通俗科学（年少男子）	H. Bromley			b			洗濯実習（女性）	E. Gardner					d
趣味（男性）	R. Pratt				c		管弦楽	E. Popkin			e		
声楽（2パート・女性）	V. Russell				c		管弦楽	E. Popkin					d
声楽（2パート・年少男子）	V. Russell					a							
声楽（2パート・成人男性）	V. Russell					b							

出典）London County Council, *Prospectus of the Smeed Road Evening Institute Session 1936-37*, 1936.　…は不詳。

ド・ロード（Smeed Road）が、ローマン・ロード・ジュニア・コマーシャル&テクニカル・イブニング・インスティテュート（Roman Road Junior Commercial and Technical Evening Institute）の分校になる等、組織の再編の影響を受けている[23]。ただし、1935-36年度のボウ・クリーク閉校は、スラム・クリアランス計画に伴うもので、再開を見込んでおり[24]、大幅な減少とは見なせない。

次に、入学者数は、開校以来増加し続け、1924-25年度には4,900人を超え、頂点に達した。性別では、第一次世界大戦期を除き、男性が女性を上回っている。これは、女性向けの有償並びに無償のインスティテュートが普及したためである。1924-25年度の場合、有償が29校・2万2千人、無償が8校・7,800人の受講者を集めていた[25]。

また、一人あたりの受講時間数は、当初、30時間程度であったが、1930年代になると、70時間を超えており、改善されている。78時間を記録した1932-33年度のリテラリー、メンズ・インスティテュートが、それぞれ48、62時間であった[26]。個別の学校の取り組みの質が向上したことがうかがえる。なお、18歳以上の成人の入学者構成比は増大する傾向にあった。全体として、約3割を占めており、4割に達する年度も確認できる。14歳以上であれば、誰でも入学することができたが、年齢構成は変容し、成人教育機関化が徐々に進んでいったことがわかる。

表2は、学校数・入学者数ともにピークに近い、1925-26年度のフリー・インスティテュート各校の開講状況をまとめたものである。12校中、共学が9校だった。同時期のLCCでは、性別による成人教育政策を採っていたことを考えると[27]、性よりも、経済的背景を重んじた点は、フリー・インスティテュートの特徴の一つと言える。そこで、地域分布に着目すると、ポプラーに4校（ボウ・クリーク、ブリティシュ・ストリート、ロシェル・ストリート並びにスミード・ロード）、キャンバーウェルに2校（コーマー・グローブとイルダートン・ロード）、また、サザークに2校（オレンジ・ストリートとレッドクリフ）が開校しており、三地区に8校が集中している。この内、ポプラーは、テムズ川沿いの立地から、イースト・インディア・ドックとウェスト・インディア・ドック、幹線道路のコマーシャル・ロード等が整備され、人口が急増した。19世紀後半には、失業者、低賃金・移民労働者が集住する地域となり、1930年までにはロンドンで最も貧しい区として知られていた[28]。依然として、無償型教育への期待は大きかったのである。

また、基本的に、週三回、平日の夜間二時間に開校したが、オレンジ・ストリートは、毎日授業を行っており、活発な様子がうかがえる。開始・終了時刻は、学校単位で異なっており、受講者の労働・生活環境に適応している。夜間の限られた時間を使い、現場ではいかなる取り組みを行っていたのであろうか。共学・大規模校のオレンジ・ストリートと、地域分布で注目されるポプラーの共学校スミード・ロードの事例に絞りつつ、さらに考察を続けることにしよう。

(3) 現場の取り組みと特質

表3は、オレンジ・ストリートの1921-22年度の時間割である。ここから、取り組みの特質として、次の三点が指摘できるだろう。

第一に、一日を二時限に分け、各時限の授業と二時限を通した授業の異なる時間設定を設けることで、教育活動の効果を高めようとした。集中を要する基礎教育分野は一時間、他方、興味や関心を尊重する実習系は二時間を使っている。また、受講者のニーズの高い科目は複数用意し、各曜日に科目を分散させ、バランスを整えた。受講者の要求を汲みながら、負担のない教育を追求したのである。

第二に、教育内容は、基礎、実用及びレクリエーション科目を中核に据えた。義務教育制度発足から、既に半世紀以上が経過していたが、読み方・書き方及び算術のスリー・アールズの比重が大きく、約3割を占めている。基礎教育を必要とする市民の存在を反映している。また、日常生活で役立つ調理、洋裁、救急療法、洗濯実習等を織り込み、身体訓練、体操等の余暇活動も奨励している。LCCでは、「このインスティテュートを受講するタイプの受講者の心を強く惹きつける唯一のものは、実用科目（practical subjects）である」[29]と分析している。アカデミックな教科目を制限し、生活と教育を統合することで、社会的不利益層の参加を促したのである。

第三に、異なる性・年齢を組み合わせたクラスの編成を試みたことである。オレンジ・ストリー

トは、無償・共学の開かれたインスティテュートであっただけに、LCCの他のイブニング・インスティテュート以上に、幅広い属性と背景を持つ、多くの受講者を集めた。一般的に、フリー・インスティテュートの教科目は、洋裁・針仕事・調理は女性、木工・金属加工及びブーツ修理は男性という傾向があった[30]。それ以外の科目は、両性が学んでいたが、スリー・アールズや体操で、年齢と性による区分を設け、成人男女が学習しやすい環境に配慮している。

表4は、スミード・ロードの1936-37年度の時間割である。表2から10年以上が経過し、平日毎日開講するようになっている。教科目では、英語と図書館、一般教育等の基礎科目、洋裁、木工、身体運動、洗濯実習等の実用及びレクリエーション科目を配した部分は、オレンジ・ストリートと共通している。だが、基礎科目を限定する一方で、旅行談話の導入や、音楽教育、スポーツの多様化により、余暇科目を拡充した。さらに、性・年齢別のよりきめ細かなクラス分けを試み、同一科目での立体的な教育アプローチを実現している。

オレンジ・ストリートの取り組みについて、LCCの専門部会は、「最初の数年間、校長は外出・宣伝することに多くの時間を費やし、クラスを広く知らせようとした。最近は、宣伝活動によらず、無理なく自然に拡大するようになっている。インスティテュートは地域に十分に知られた存在となり、夜間教育への要求は一層高まっている」[31]と成果を報告した。フリー・インスティテュートは、無償型普通夜間学校の単なる残余とは言えない。地域のニーズに柔軟に応じた教育内容の編成や、きめ細かいクラスの組織化によって、青少年だけでなく、社会的な不利益を抱えた成人の学習機会を保障した。夜間教育活動の伝統を革新的に継承することに成功し、無償型成人教育という独自の役割を果たしたのである。

おわりに

以上、1913年に開校したフリー・インスティテュートの発展と現場の取り組みを検討してきた。このインスティテュートは、受講料を負担できない男女に一般教育を提供する専門的な夜間教育機関として、発足した。そのルーツは、深刻な出席問題を抱えていた無償型普通夜間学校であり、出発時に負の影響を受けている。しかし、有償化への切り替えや登録料制度創設で、その後の発展を導く基盤が構築された。開校地は、ポプラーを中心とする貧困地区に集中しており、無償型教育への期待は大きかった。

現場の取り組みと見ると、時間配分の工夫や、ニーズの高い教科目は複数を開講する等、受講者にとっての魅力があり、負担のない教育活動を追求した。また、基礎、実用及びレクリエーション科目を中核に据え、アカデミックな科目を制限し、生活と教育を統合することで、社会的不利益層の参加を促した。性・年齢別のよりきめ細かなクラス分けで、同一科目での立体的な教育アプローチも実現している。

チョーク（Chalk, w. J.）は、ロンドンにおける夜間学校組織の基本方針として、「専門分化」（specialisation）を指摘している[32]。無償型普通夜間学校から専門分化したフリー・インスティテュートは、受講者のニーズや背景等を柔軟に反映しつつ、夜間教育活動の伝統を再構成することによって、無償型成人教育の重要な役割を担ったのである。その際、LCCの成人教育機関との相互関係の中で、具体的軌跡を辿ることになった、と考えられる。そこで、主な成人教育機関とフリー・インスティテュートの機能の比較考察を、今後の課題としたい。

（付記）本稿は、JSPS科研費25381092、平成25年度東洋大学井上円了記念研究助成金・個人研究「日本とイギリスの成人・コミュニティ教育発展史に関する基盤的・実証的研究」（研究代表者関直規）の助成を受けたものである。

注・引用文献

1) The Ministry of Education, Adult Education Committee, *Final Report*, H.M.S.O., 1919, p.208.

2) Gordon, P., Aldrich, R and Dean, D., *Education and Policy in England in the Twentieth Century*, The Woburn Press, 1991, p.219.

3) Devereux, W. A., *Adult Education in Inner London*, Shepheard Waywyn in Collaboration with Inner London Education Authority, 1982, Hughes, M., London Took the Lead: Institutes for Women, *Studies in the Education of Adults*, Vol.24, No.1, April 1992, pp.41-55、関直規「両大戦間期イギリスのLEA成人教育構想―ロンドンの『リテラリー・イン

スティテュート』を中心に―」『東洋大学文学部紀要』第64集、教育学科編XXXⅥ、2011年、pp.47-60等。

4) 上杉孝實・谷和明「コミュニティ教育の国際的発展と公民館」日本社会教育学会特別年報編集委員会編『現代公民館の創造―公民館50年の歩みと展望―』東洋館出版社、1999年、pp.55-69、上杉孝實「イギリス」日本公民館学会編『公民館・コミュニティ施設ハンドブック』エイデル研究所、2006年、pp.404-405等。

5) Bray, S. E., The Evening Continuation School, Spalding, T. A., *The Work of the London School Board*, 2nd ed., P. S. King & Son, 1900, pp.257-258.

6) 関直規「前世紀転換期イギリス公教育における成人教育の萌芽―ロンドン学務委員会の夜間継続学校を中心に―」『東洋大学文学部紀要』第66集、教育学科編XXXⅧ、2013年、pp.67-74。

7) London County Council, *Eight Years of Technical Education and Continuation Schools (Mostly Evening Work)*, Report by the Education Officer, 1912.

8) *Ibid*., p.56.

9) *Ibid*., p.61.

10) Report of the Higher Education Sub-Committee, London County Council Education Committee, *Minutes of Proceedings*, 7 May, 1913, p.880.

11) *Ibid*.

12) 関直規「ロンドン成人教育における女性教育の開発と多面的発展―『ウィメンズ・インスティテュート』を事例にして―」『東洋大学大学院紀要』第49集、2013年、pp.351-365。

13) London County Council, *Report of the Education Committee to the Council on the Re-organisation of Evening Schools*, 3rd June, 1913, p.12.

14) London County Council, *Evening Schools: Statistics Relating to Evening Schools Opened in the Session 1913-14*, 1914, p.19.

15) London County Council, *Annual Report of the Council*, 1914, p.20.

16) Board of Education, *Report of the H.M. Inspectors on the New Scheme for the Re-organisation of the Evening Institutes in the Administrative County of London for the Period ending on the 31st July 1914*, p.10.

17) Report of the Higher Education Sub-Committee, London County Council Education Committee, *Minutes of Proceedings*, 27 May, 1914, p.1023.

18) 男性対象のオールド・ウリッジ・ロード（Old Woolwich Road）がジェネラル・インスティテュート（General Institute）に、女性対象のネットレイ・ストリート（Netley Street）が有償に、マリーオン・パーク（Maryon Park）がジュニア・テクニカル・インスティテュート（Junior Technical Institute）に改組されている。（*Ibid*., pp.1040-1041.）

19) *Ibid*., pp.1023-1028.

20) London County Council, *Education Service Particulars for the Year 1923-24*, 1923, p.195.

21) London County Council, *Evening Institutes – Statistics 1916-17*, 1917, table1.

22) London County Council, *A Guide to Continued Education in London*, Privileges of Citizenship Series No.1, Hodder & Stoughton Ltd., 1925, p.38.

23) Report of the Higher Education Sub-Committee, London County Council Education Committee, *Minutes of Proceedings*, 7 July, 1937, p.254.

24) Report of the Higher Education Sub-Committee, London County Council Education Committee, *Minutes of Proceedings*, 26 June, 1935, p.282.

25) London County Council, *London Statistics 1925-26*, 1927, p.219.

26) London County Council, *London Statistics 1933-34*, 1935, p.260.

27) 関直規「イギリスにおける男性労働者の支援と成人教育施設の形成過程―ロンドンの『メンズ・インスティテュート』を中心に―」『日本公民館学会年報』第9号、2012年、pp.79-89。

28) “Poplar”, Weinreb, B., Hibbert, C., Keay, Julia and Keay, John, *The London Encyclopaedia*, 3rd ed., Macmillan, 2008, p.654.

29) London County Council, *Education Act, 1918, Scheme of the Local Education Authority*, 1920, p.43.

30) *Ibid*.

31) London County Council Education Committee, Higher Education Sub-Committee, *Report of the Evening Institutes – Orange Street (Free Mixed) Institute (Southwark, N)*, 1st November, 1928, p.1.

32) Chalk, W. J., The Work of the Evening Schools, London County Council, *Annual Report of the Council, 1935*, Vol.4, 1937, p.15.